

鳥城

第83号
令和4年12月発行
(2022年)

発行
岡山県俳人協会

事務局
〒700-0824
岡山市北区内山下
2-5-10 角南方
TEL (086) 223-7519
振替口座01380-0-102923
(年会費専用)

岡山県俳人協会

第四十三回俳句大会開催

令和4年度の岡山県俳人協会第43回俳句大会が、10月16日(日)、岡山国際交流センターに於いて伊藤伊那男先生(社)俳人協会評議員「銀漢」主宰)をお迎えし開催された。

当日は、爽やかな秋日和でコロナ禍の中にも再会を喜び、会場は明るい雰囲気にも包まれた。

今回は応募句802句、当日出席者108名で大変盛会となり、投句数は99句であった。

午後1時、石見邦憲常任幹事の司会で開会。曾根薫風会長による挨拶の中で、「第40回記念大会の時立ち上げた『新人奨励賞』を受賞した宇野愛斗氏は大学生、西江友里氏は社会人となられ、西江氏は本日は当日句の選者を務められた。また、誠に悲しいことに、長年本協会に功績を残された竹本孝氏の訃報。病床にありながら最後まで俳句に向き合われ、「俳縁」の大切さをお示し下さった。」との紹介があった。終りに本協会の事務局の堅実な運営に謝意を述べられ締め括られた。

講演に先立ち、司会者より伊藤先生の紹介がなされ、前日より来岡されていた先生は、岡山の印象を、岡山城、後楽園も素晴らしく、食べ物はおいしい、若者が多く、宝石店が多く、文化的、経済的に大変恵まれている街と言われた。



伊藤伊那男先生

午後1時10分、「芭蕉の謎 曾良の謎」「おのほそ道」を巡って」と題して、講演が始まった。用意された資料をもとに芭蕉の旅路と曾良の旅日記との不思議を系図を交えながら、時間いっぱいご講演頂き、会場全員が熱心に聞き入った。

講演後、事前応募句の中から選ばれた特選2句を含む17句を懇切丁寧にご講評頂き、俳句の真髄に触れた思いであった。

休憩後、事前応募句の7賞と、新人賞、秀逸賞、優秀賞の表彰、賞品が授与された。

当日句は、伊藤先生と12名の選者による特選1句の丁寧な講評があり、充実の時間であった。今回は、賞を係が受賞者の席へ届けたが、伊藤先生は、自ら席まで行ってお渡し下さり、とても親近感を覚えた。

高点句より、大会大賞、鳥城賞、支部長賞が授与され、すべてが速やかに行われたため、予定時刻より早く午後3時40分、柴田奈美副会長の挨拶で、大会は無事終了した。

今年も懇親会は中止となり、コロナの終息を願うばかりである。

(森脇八重)



会場風景

応募句入賞作品

おかやま県民文化祭賞

大袈裟に泣いて喝采村芝居

岡山県知事賞

牛飼ひを牛が呼ぶ声秋夕焼

岡山市芸術祭実行委員長賞

七曜を気にせぬ暮し心太

岡山市長賞

母送る花野まるごと供華として

山陽新聞社賞

生みたての卵ざらつく春隣

RSK山陽放送賞

一本の釘を足場に燕の巢

NHK岡山放送局長賞

蛍の闇より濡れて戻りけり

秀逸賞

後ろから脱がせてもらふ汗のシャツ

墓洗ふ叔父は十九の学徒兵

極月や父の手くせに沿ふ砥石

一村がすつぽり桃の花の中

朝鴉や床屋の熱き蒸しタオル

郭公や戸口に記す炭焼日

天折の子に会ひにゆく午睡かな

でむしや秘境の駅の時刻表

大南風街へ煙草が編む漁網

捨て切れぬ物に埋もれて更衣

竹皮を脱ぐ反抗期真つ只中

優秀賞

失ひし乳房は神に春の夜

先生の夏帽飛んで子らが追ふ

傘寿てふ涼しき齢たまはりぬ

千枚田いま千枚の芒原

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 高村 萬青 | 高村 萬青 | 大塚 功子 | 岸 しのぶ | 佐藤 史男 | 原田 慶子 | 竹本 孝 | 大森 博子 | 曾根 薫風 | 齋藤 迪子 | 佐藤 恭子 | 角南 英二 | 高木 幸子 | 石村美智子 | 小林 克己 | 小倉貴久江 | 安井 和子 | 北根 久子 | 田村千代子 | 目賀 紀子 | 難波 政子 | 山本 那夷 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|

双眼に余る穂高の天の川
十二支に席なき猫と寝正月
大緑蔭コントラバスを据ゑにけり
梅庭母に及ばぬことばかり
一山を背負ふ古刹や新樹光
背表紙のはづれし辞典文化の日

新人奨励賞

木蓮を掃きつつ坂を下りけり
シクラメン貸出本のページ折れ

伊藤伊那男先生特選

母送る花野まるごと供華として
一本の釘を足場に燕の巢

入賞重複

ほほづきや母の遺品にわれの文
奴髭落さず帰る祭の子
無人駅また無人駅田水張る
無為の日も余命の一日夕桜
高塚の中の作業場燕来る
惜敗の球児仰げり雲の峰
待合にひびく産声明易し
蜜柑咲く鳥へ一里の渡し船



応募句・岡山県知事賞表彰

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 土屋 徹三 | 植木 智子 | 密田真理子 | 菱川 瑞枝 | 高杉 浪子 | 平田千恵子 | 西江 友里 | 福田 悠暁 | 岸 しのぶ | 原田 慶子 | 原田 慶子 | 岸 しのぶ | 岸 しのぶ | 岸 しのぶ | 原田 慶子 | 曾根 薫風 | 竹本 孝 | 佐藤 史男 | 角南 英二 | 高村 萬青 | 岸 しのぶ | 岸 しのぶ | 原田 慶子 | 原田 慶子 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|



当日句入賞作品

大会大賞

神前にでんと三俵今年米

烏城賞

一才の踏み出す一歩小鳥くる

支部長賞

塩壺の塩さらさらと十三夜

秀逸賞

婚の荷の底に地下足袋菊日和

語りつつ善人となる花野かな

フェリー来る色なき風の島を縫ひ

早稲の香や石の一つが村境

箒目に靴跡あまた菊日和

背丈ほど伸びてさみしき藤袴

秋時雨瀬渡し舟が戻りけり

一言に返るふたこと秋深む

きちさちのひと跳び山気深まりぬ
青年が小銭をさぐる赤い羽根

- | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 安藤 加代 | 佐藤 史男 | 広畑美千代 | 大森 博子 | 星島 朋代 | 島村 博子 | 景山 薫 | 高倉 早苗 | 佐藤 恭子 | 磯橋 瑛子 | 丸山 敏幸 | 小倉貴久江 | 近常 倫子 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|



新人奨励賞

伊藤伊那男先生特選
湧き出づる大地の炎彼岸花

佐藤 淑子

選者特選

曾根 薫風特選

萬紅葉野猿注意の札を這ふ

小野 純子

景山 薫特選

神前にでんと三俵今年米

安藤 加代

赤木ふみの特選

吟行へ永遠の舟出や望の潮

左居 正恵

大倉 白帆特選

草原の律の風音水の音

岡本三恵子

杉本征之進特選

長島に海といふ壁霧笛かな

清水佳壽美

密田真理子特選

新蕎麦や妻は十割われ二八

山県 章宏

難波 政子特選

婚の荷の底に地下足袋菊日和

大森 博子

浮田 雁人特選

一才の踏み出す一歩小鳥くる

佐藤 史男

磨家 泉特選

いち早く池畔の鶯のもみぢせる

中尾かすみ

小倉貴久江特選

峰風に揺れ一村の稲の秋

二司 能林

三垣 博特選

指揮棒へひびきあふ音秋気澄む

眞木 雅子

西江 友里特選

塩壺の塩さらさらと十三夜

広畑美千代

演題
芭蕉の謎 會長の謎
おくのほそ道を探って
講師 伊藤伊那男先生



選者より特選賞



当日句・大会大賞表彰



当日句採点風景



受付風景



当日句選句中の特別選者

伊藤伊那男先生講演

芭蕉の謎 曾良の謎

—「おくのほそ道」を巡って—



本日の講演は「おくのほそ道」と「曾良旅日記」の二つを突き合わせ二人の謎を解いての講演です。

おくのほそ道と曾良の旅日記を突き合わせて見ると、いろんな矛盾また新事実がある。例えば日光東照宮に入ったかどうか疑問を持つ学者がいたが、でも入った事が曾良の日記により明らかになった。おくのほそ道の越後の記録には無いが曾良の日記で、どこでどう泊ったかが明らかにすると、芭蕉の実態とは何だったのか、いったい何者なのかいくつもが浮び上がる。曾良旅日記と突き合わせると「アレおかしいな」「謎だよな」が幾つかあるが謎の中から分り易い謎を二つの場所と比較してみる。

日光

芭蕉

卯月朔日、御山に詣拝す。

往昔此御山を二荒山と書しを、空海大師開基の時、日光と改め給ふ。千歳未来をさとり給ふにや。今此御光一天にか、やきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖、穩なり。猶、憚多くて、筆をさし置きぬ。

あらたうと青葉若葉の日の光

ここで見るとお山に詣拝するとあるので普通に読めば東照宮に入ったのだと読めるが、その

時代でみると幕府の政治は落着いてきたが、まだ大名の取潰しがあつた時、一介の俳諧師を日光東照宮に入れてくれるはずがない。家康の墓が在る所で誰にでも見せてくれる訳がなく近くから遙拝したのだろうと解釈されていたのが一般的である。

曾良

四月朔日、前夜ヨリ小雨降。辰上刻、宿ヲ出。止テハ折々小雨ス。終日雲、午ノ尅、日光へ着。雨止。清水寺ノ書、養源院へ届。大楽院へ使僧ヲ被レ添。折節大楽院客有レ之、未ノ下尅迄待テ御宮拝見。

この様に具体的に書かれており絶対に入っている。清水寺は浅草の天台宗の寺で、そこで作成した書を養源院へ届けたとある。養源院は水戸徳川家直轄の日光のお寺であり、ここに書を届けその後養源院の誰かが案内してくれた。その日幕府の御用絵師が絵の修復の見積をする為に調べに入っていた。終るのを待って芭蕉と曾良は入った。幕府は仙台藩に改修を命令するが、安く上げようと工作をして出し渋り、それを幕府が知り不信を持った背景があつた。芭蕉と曾良は清水寺で作成された幕府からの密書か指示書の水戸藩の僧坊に届ける役割があり東照宮のお詣りができたと解釈できる。この記述がすごく重要である。きちんと初めから予定を組んで日光を訪ねたと明確になる。

越後路

芭蕉

加賀の府まで百卅里と聞。鼠の関を越ゆれば、越後の地に歩行を改て、越中の国一ぶりの関に到る。此間九日、暑湿の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

文月や六日も常の夜にはあらず

荒海や佐渡によこたふ天河
越後の国を通過するのに九日間を要しているのに「越後の地に歩行を改て」と十文字で新潟を飛ばしている。ところが曾良旅日記を見ると意外な事がでる。

曾良

(六月) 廿八日 朝晴。(中略)

申ノ上刻ニ村上ニ着、宿借テ城中へ案内。喜平・友兵来テ逢。彦左衛門ヲ同道ス。

なんと村上城に芭蕉と曾良が入っている。宿に着くとすぐに迎えが来てお城に入った。言うことは事前に何日に着くと城でも芭蕉が来る事が分かつていた。これが不思議でそのことが「おくのほそ道」に一切書かれていない。曾良旅日記が発見されなければ誰にも分らない事である。

おくのほそ道の旅は行き当りばつたりで巡っていない。きちんと日光に入る日も決っており村上に入る日も決っている。予定もきちんと組まれた旅で前前に連絡を取り合っている。東照宮へ届ける仕事は芭蕉でなく曾良の仕事であろう。村上城を訪ねるのも芭蕉の希望でなく曾良の個人的な関係。越後の部分で見ると主従が逆転している。越後からは曾良の都合に合わせて芭蕉が付いて歩き面白くなく新潟の記述が少なくなつたのかも？おくのほそ道の旅は芭蕉の旅だが、おくのほそ道の旅そのものの実態はどうも主役が曾良と思われる。

おくのほそ道の前半は水戸徳川家に、後半は大垣藩に陰から護られた旅であつた。

系図からすれば芭蕉が伊賀上野の血筋であり、曾良が徳川家の血筋であればもしそうだったとすれば、おくのほそ道は全部理解できる。情況証拠で最強コンビの旅であつたと言える。

※曾良は伊勢長島藩に出仕していた。長島藩

主の三男の良兼公が村上藩家老の家に養子で入った。大垣藩と長島藩の初代は兄弟である。

曾良旅日記で新事実が分かり、また系図と合わせた分かり易い講演でした。

(三垣 博)

岡山の芭蕉句碑めぐり

大森 哲也

先に岡山県俳人協会「烏城」75号(平成30年6月号)で紹介しました「岡山の芭蕉句碑めぐり」後、新たに分りました句碑を追加いたします。これは、塩尻青茄氏や田中昭三氏の著書にも紹介されていないものですが、「岡山市史」(昭和43年、宗教教育編)には収められています。場所は、中区平井7丁目妙廣寺境内で、県道岡山玉野線と東山斎場線の交わる平井4丁目交差点を西(旭川堤防側)へ百m入った所です。

木のもとに 汁も^{あま}鱈も さくら哉 翁
明治23年(1890) 湊・倉田地区等の有志により建立。

芭蕉晩年の元禄3年(1690)3月伊賀上野、小川風麦亭での作。木の下で蘆を敷き酒を飲んでいると折から落花を浴びて汁も鱈も何もかも一面花びらに埋もれてしまった、との意。滋味と「軽み」のある句と言われ、その後の芭蕉俳諧の転機にもなり、新時代を築く糸口になったと言われています。

句碑の左上から下へ、発起人の1人と思われる

る「塩はまや けふり(煙)の外(ほか)は雪の朝」と読まれる句が彫られています。判然としません。当時の平井句会の盛況が窺えます。尚、本件の場所再発見と発起人の句解説に当たっては、岡山市観光ボランティア・県記録資料館・秋桜俳句会の諸兄弟姉に大変お世話になりました。



句碑左肩の句

俳句雑話⑦

披講に思うこと

石見 邦慧

俳句の場で披講は避けられない作業である。披講が句の印象を左右するといっても過言ではない。自分の句は句意を的確に伝えてほしいと誰もが思うのではないだろうか。

そのためにはまず大きな声で堂々と読むこと。読み手が緊張や不安や照れでこそこそ読むと、句が自信のないイメージになってしまう。

大きな声で読むというのには実は一朝一夕には身につかないことで、そのためには毎朝新聞のコラムを「大きな声でゆっくりはつきり」読む訓練をするといふ。頭脳や身体老化を防ぐためにも効果があるようだ。

次に句の意味を考えて読む。これは当然と思うかもしれないが、声に出したときに正しく句意が伝わっていないことがある。俳句は五七五の韻文であるからそのリズムは当然大切にしなければならぬが、どの句でも五・七・五と機械的に切ってしまうと、例えば句跨りの句などは意味が伝わりにくくなる。五・七・五のリズムを踏まえた上で意味をとって読む。意味を伝えるためには伝えたい言葉を「高く・強く・ゆっくり」読む。自分の気分で一音一音伸ばして歌いあげたり、中七の語尾を上げたりしないこと。そうすると詠嘆調になり、押し付けがましい印象になってしまう。

とにかく披講する句は一句一句作者の思いがこもっている。それぞれの句に対して謙虚に敬意を持って「読ませていただく」という気持ちが必要なのではなからうか。

句集紹介

柴田奈美句集『イニシヤル』

美と疵

小西 瞬夏

手に取ったとたん、祝福するように表紙を取り巻く薔薇の花々。

待望の柴田奈美句集が十五年ぶりに上梓された。大学での研究を精力的にこなし、最愛のお父様を見送られ、多忙な中での作句に長く地道に取り組んでこられた作者。落ち着いた知的な外見とは少し違う乙女な内面を持つ奈美さんは、永遠の少女である。美しいもの、愛らしいものを愛で、それでいてその中に、ある種の疵があることもちゃんと知っておられる。いえ、その疵をも丸ごととおしんでしまう。美しさの中に小さな、しかしするどい棘を持つ薔薇のようである。句をいくつか引いてみたい。

玉ねぎを呪詛のごとくに刻みけり

何気ない日常、独り言のようにつぶやく言葉が「呪詛」であると感じる、ささやかな屈折。

真黒な蝶々と草いきれ

蝶の湧きつづけ少女の白昼夢

蝶は、美しさのなかにも何か不穏なものを含む。言葉では割り切ることのできない心象風景を立ち上げらせる。

人形に巻きし包帯桃の花

白息をしづかに使ひうらぎりぬ

鬼女あまた懐に抱き山眠る

香水のかをり名画を汚しゆく
毒の香させつつ小さき嘘つきぬ

人形、白息、鬼女、香水、毒の香…それが包帯を巻いたり、うらぎったり、懐に抱いたり、汚したり、嘘をついたり…美しい姿でありながら傷を抱えてけなげに生きる命の姿がある。

ピアノの蓋棺のごとく閉めて凍つ

ピアノの蓋を閉めるとき、お父様をお見送りされたときの棺の蓋を思う。「凍つ」でピアノの冷たく黒光りする様子がありありと浮かび、悲しみが増す。

前生の咎瘥として冬薔薇

作者が愛してやまない薔薇のなかでも、冬薔薇を、前生の咎であると感じる感性。自分自身の内面と前生にまでさかのぼり、深く対峙していく生きざまを感じさせる。

また、このような研ぎ澄まされた、壊れやすい硝子のような作品群を生み出すと同時に、俳句史を研究してこられた作者は、俳句の諧謔、そのなかでも上質の諧謔が持ち味でもある。

冬支度済ませてのちの老い支度

口答へしさうな唇の浅利かな

ダンスの手離し大きくさめかな

受け取つて貰へぬチラシたんぽぽ黄

白菜を割つて仕掛けの何もなし

初蝶を次々生める欠伸かな

自分自身を真摯に突き詰めていくことの先に、懸命な自分を客観的に見つめ、滑稽にも思える境地がくるのかもしれない。



秋季吟行句会

— 冬晴れの干拓の町早島 —

令和4年11月27日(日)午後1時。早島町民会館ゆるびの舎に38名の参加者が揃い、秋季吟行という名の冬季吟行が開催された。

曾根薫風会長からは、「俳縁というのは素晴らしいものだ。趣味の会に始まる岡山県俳人協会のこれからも、俳句を通じて広がるものになりたい」という趣旨の挨拶があった。

その後配布の作品集は、午前中冬晴れの中を吟行した参加者が、それぞれ思い思いの場所に足を運ばれた様子が窺える114句だった。

早島町内の吟行地は多彩で、いかしの舎、早島公園を始め、早島が島だった江戸時代以前の岬宮跡に残された巨岩は圧巻。川港を始め、舟を通していた跡が町中に見られる。

「いぐさのまち早島」にうたわれる蘭草は、今でこそプランターで見られなくなつたが、在りし日の話や、現在の花菓伝承館の活

動の様子も少しは伝えられたと思う。

互選3句、特別選者は5句選内特選1句。

俳歴の長い方々、今日入会届を直接出された4名の方のどちらにも変わらず、厳選中の厳選に苦闘(?)

選句後は披露、採点、特別選者の特選句講評、表彰、高得点表彰と続き、景山薫副会長の挨拶で2時半閉会となった。

コロナ禍の中、自家用車で、バスで、列車でタクシードで会場まで足を運んでくださった皆様に感謝いたします。(吟行担当 左居 正恵)

選者特選句

曾根 薫風選

冬うらら役場で終はる不老みち

小倉貴久江

景山 薫選

冬あたたか鳩の糞せる巨石群

古谷 静

難波 政子選

冬うらら役場で終はる不老みち

小倉貴久江



角南 英二選

潮の香の岩をはなれぬ雪螢

左居 正恵

大森 哲也選

もみち降るかつて荒磯の巨石群

脇本 妙

佐藤 史男選

四阿の藁のほつれや帰り花

曾根 薫風

互選高点句

冬うらら役場で終はる不老みち

小倉貴久江

冬の川畳おもての荷積み跡

高木 幸子

潮の香の岩をはなれぬ雪螢

脇本 妙

手を上げて止める巡回バス小春

左居 正恵

小春日や古戦場まで干拓地

佐藤 史男

四阿の藁のほつれや帰り花

赤木ふみを

綿虫や波あと著き巨石群

曾根 薫風

冬晴やシルクハットの開拓者

延堂 裕子

山茶花や織機の音の消えし町

小野 純子

冬日差沓脱石に白草履

大塚 功子

てつべんは木の葉しくれや不老みち

小倉貴久江

第十六集合同句集鑑賞 2

足音

内田 ひわ

コロッケはさくさく冬は駆け足で 小林 美鈴

南京で暮らし始めた頃、同僚と小さな居酒屋へ行きました。マスターは日本人で、美味、しかも安価。その夜、早めに帰ろうとした私たちに、マスターが持たせてくれたのがコロッケでした。異国での初めての冬、地下鉄を出て、プラタナスの枯葉を踏みながら宿舎に帰り、コート脱いでから食べたコロッケは本当においしかったです。——コロッケはさくさく冬は駆け足で——この句の明るさ、透明な温かさ、少年のような冬の足音に心をひかれます。そして、これから先心細いことがあつたとしても、大丈夫だよ、あの冬と同じだよと、この句が私の肩をポンとたたいてくれるような気がするのです。

足音に齢ありけり鳥曇

国方 一航

最近観た二本の映画に、ある俳優が出ていました。一本は、音楽隊の指揮者の役。もう一本は、悲しい怒りを心に抱えた老人の役。背筋の伸びた姿と、ヨタヨタと走る背の丸まった姿。足音までが違う。そう思った時、この句が胸にすんと落ちました。晩春の曇りがちな日々、春の輝きは去り、夏はもう私たちの季節ではない。けれども、「齢」は人生そのもので、「足音」はその人生を生きた証だ。この句から、作者の深くてしかな足音が聞こえてくるようです。

会員の活躍

◆森脇 八重

中国地区現代俳句大会 優秀賞
スケボーの少年春の翼もつ

◆涼野 海音

第25回 毎日俳句大賞 小川軽舟選 佳作
桃剥いて夜の雲はぐれやすきかな
栗拾ふ後ろの夕日誰も見えず

第8回龍太賞 稲畑汀子選

赤子の目
空に紛れず新涼の風見鶏
家々は灯の色たがへ星祭
冬に入るかしこさうなる赤子の目
ほか7句

◆柴田 奈美

第25回 夢二俳句大賞 高野ムツオ選 佳作
山鳩の飛び立つ羽音夢二の忌

第61回 全国俳句大会 (俳人協会)

西山 睦選 入選
オルゴール鳴り終るかに金魚の死
野中亮介選 入選
オルゴール鳴り終るかに金魚の死

新会員紹介

〔鳥城〕第82号以降

岡田たか子

禅林の廊下黒々寒軋む

竹内 建雄 (あくら句会)

末枯や那岐の山道蕎麦する

佐藤 淑子 (茶屋町句会)

湧き出づる大地の炎彼岸花

星島 朋代 (茶屋町句会)

枯菊や息ふきかへす筆の先

磯橋 瑛子 (茶屋町句会)

秋時雨瀬渡し舟の戻りけり

逢坂 洋子

お洒落して歩きたくなる薔薇の道

赤城 早希

どこまでも吾子を見守る冬の月

訃報 謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

竹本 孝 令和4年9月9日
三村 絃司 令和4年10月27日

今後の主な行事予定

令和5年度総会

令和5年3月12日(日)

岡山県立図書館

春季吟行句会

4月9日(日)

高粱総合文化会館

第44回俳句大会

10月15日(日)

岡山国際交流センター

倉敷市文化祭俳句大会 (協賛)

5月13日(土)

倉敷市民会館

編集後記

写真 左居正恵 小林克己
大森哲也 高杉浪子
カット 佐藤史男



コロナの影響で世の中すべての活動が制限されている中で俳句大会・吟行句会が開催され、少し明りが見えてきました。句作あるのみです。
政治的にも経済的にもコロナ的にも、何だかなあと思う昨今ですが、編集で皆さんの句に触れていると、生活の、人生の、原点に戻れるような気がします。(内田ひわ)
四年間、「鳥城」に携わらせていただきいろいろ勉強させていただきました有り難うございました。皆々様の御健吟をお祈り申し上げます。(岡本三恵子)
なかなか収束しないコロナ禍のなか、鳥城をお届けすることができ嬉しく思います。広畑編集長のご尽力に感謝致します。(原田慶子)
「鳥城」の編集に携わって一年後、新型コロナウイルス拡大のため、岡山県俳人協会の行事が一時中止となりました。「鳥城」も一度の休刊はありましたが、四年間発行することができましたのは、原稿をお寄せくださった皆さまのご協力のお陰と感謝しております。ありがとうございます。コロナの一日も早い収束を願いつつ……。(広畑美千代)